

調べる楽しみ

―大宮公園開園120年展を担当して―

埼玉県教育局生涯学習文化財課 水口 由紀子

6年前、私は埼玉県立博物館（現・歴史と民俗の博物館）の学芸員をしており、スポット展示「氷川の杜 大宮公園開園120年展」を担当しました。

今回の科学技術シンポジウムは「自然環境と人間活動」がテーマなので、自然環境を身近に感じることでできる「公園」を造るために人間がどのような活動を行ってきたのかを「大宮公園」を事例に紹介します。また、合わせて「学芸員」の仕事の一端も紹介できればと思います。

県立博物館は県営大宮公園の中にありますが、それまで大宮公園についての展示を行ったことがありませんでした。テーマとしてはあまりにローカルで、資料も少ないということで敬遠されてきた

のかもしれない。

このスポット展も大宮公園管理事務所の呼びかけで、事務所主催の120周年事業の一環として開催することになりました。「スポット展」という名の通り、県立博物館の季節展示室で行う、規模の小さな展示でした。

1. 展示のための資料調査

担当する展示テーマが決まると、まずどのような資料がどこにあるのかを調べます。その時に参考になるのが、これまで行われた類似テーマの展示です。その時に刊行された展示図録をみると、展示内容や展示資料がわかります。

大宮公園をテーマとした展示は少な

く、参考となったのはさいたま文学館で1999年に開催された企画展「大宮公園と文学者たち」です。大宮公園の来園者の中には著名な文学者が含まれており、大宮公園を舞台とした作品も数多く生まれました。この企画展は大宮公園のあゆみとともに、それらの作品を紹介する内容でした。

今回は大宮公園の歴史がテーマなので、展示図録以外の刊行物も探しました。最も参考となったのは1982年に刊行された『大宮市史』です。根拠となる資料を提示しながら、誕生から戦時下までの公園の生い立ちが記されています。

ある程度調査が進むと、次に展示構成を考えます。いくつかのテーマを設定し、展示順序を決めます。そして、来館者の方々に展示テーマを伝えるためにはどのような資料を展示すべきかを考えます。また、資料調査の中で新発見の資料があれば、逆に、それを生かすテーマを設定することもあります。

次に取りかかるのが、出品交渉です。一番労力を使うのが、この交渉です。出品を依頼しても断られる場合もあり、このような時は類似の資料を探し、見つからない場合はテーマを変更します。試行

錯誤を繰り返して、やっと一つの展示構成が出来上がります。

第1表 埼玉県における公園の設立順序

順位	公園名称	設置場所	設立年月日	面積
1	偕楽園	さいたま市綱神社の旧境内地	明治7年(1874) 11月12日	8反3畝 (約8,225㎡)
2	忍公園 (明治30年成田公園と改称)	行田市忍城内諏訪部内	明治8年(1875) 5月9日	1町1反 (約10,901㎡)
3	与野公園	さいたま市天祖神社・御獄大園神社旧境内地	明治10年(1877) 5月19日	1町3反5畝 (約1ha3,378㎡)
4	大宮公園 (通称:氷川公園、大宮氷川公園)	さいたま市氷川神社の旧境内地	明治19年(1885) 9月	11町6反1畝 (約11ha5,055㎡)

そして、展示タイトルを決め、ポスターやチラシの印刷準備に入ります。展示タイトルやポスターは展示のイメージを左右するもので、たいへん重要です。外部から資料を借りる場合は、その日程を調整します。そして、図録やパンフレットの執筆、これと並行して展示説明やキャプションの執筆を進めていきます。この作業に入る頃には、展示初日を見ながら、追われるように仕事を進める日々が続きます。

2. 公園の誕生

私たちにとって公園は散歩に行き気分転換をする場、子どもの遊び場など、日常生活に密着した場所です。しかし、明治から昭和初期にかけての公園は、日帰りや一泊で出かける行楽地であったことが、調べて行く中でわかってきました。

また、「公園」という施設は江戸時代以前の日本にはなく、明治時代に創り出されたものだということもわかりました。それまでの日本には「庭園(ガーデン)」はありましたが、「公園(パーク)」はなかったのです。

明治維新後、政府は新しい国の仕組み

を作ろうと、さまざまな施策を打ち出しました。その中で、国に返納された旧社寺領(上地)の有効活用が模索されました。そこで提案されたのが、西欧の近代都市には必ず存在する「公園」として、その土地を活用することでした。

1973年(明治6)に明治政府は、全国の府県に対して公園設置の候補地を選定するように通達を出しています。

それを受けて、埼玉県では明治7年に偕楽園(さいたま市)、明治8年に成田公園(行田市)、明治10年に与野公園(さいたま市)が開園しました。

今回テーマとした大宮公園は埼玉県で最も古い公園ではありませんが、以下述べるように、先に開園した3つの公園とは規模も内容も異なるものでした。

4つの公園についての簡単な表を作りましたが、面積に注目すると、大宮公園がとても広いことがわかります(第1表)。

大宮公園は氷川神社から返納された官有地に造られました。1948年(昭和23)にその呼称が「埼玉県立大宮公園」と決められるまでは、神社名にちなみ「氷川公園」または「大宮氷川公園」と呼ばれることが多かったのです。

1880年(明治13)に県令(当時の知事)によって、氷川神社からの返納地の一部に植栽を行い、散策路が設けられました。

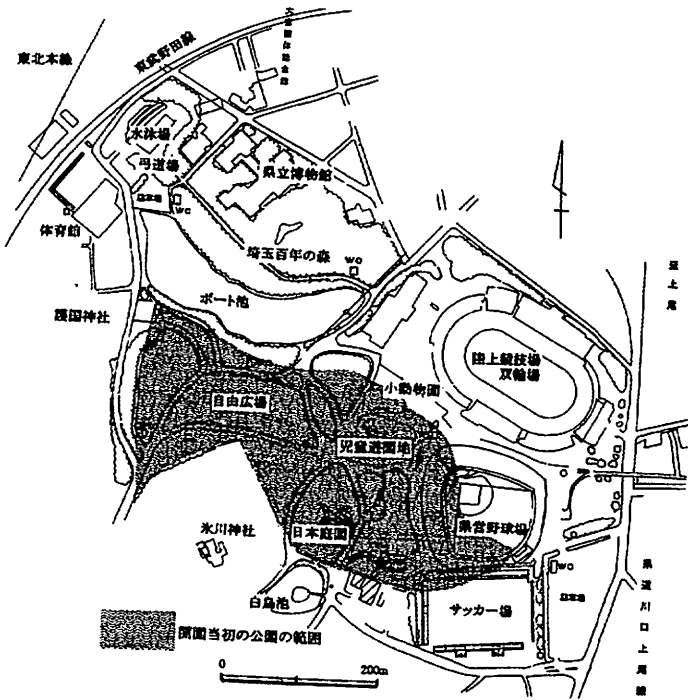
その3年後、現在の高崎線の前身・日本鉄道第一区線の上野―熊谷間が開通しました。しかし、大宮には駅ができませんでした。このままでは町勢が衰えるばかりと心配した人々は二つの請願運動に

取り組みました。

一つは大宮駅の設置、もう一つは氷川神社旧境内地の本格的な公園化です。

公園の設置・開園後の様子は県立文書館に保管されている埼玉県行政文書(重要文化財)からある程度追うことができます。

1884年(明治17)6月に国から公園設置の許可が下りました。翌々月の8



第1図 現在の大宮公園概略図

開園当初の公園は氷川神社に隣接したアミ掛けの部分で、当時の新聞には「魚の形をした公園」と紹介されました。

現在はこの図の他に、第2公園、第3公園まであります。

月に「大宮公園着手順序書」が定められ、県庁内に世話掛(29名)が置かれました。そして、一年間の準備期間を経て、翌年9月に氷川神社の秋季祭にあわせて開園

しました。(※大宮駅は同年3月に開業)

残念ながら、埼玉県行政文書に開園式前後の資料は残っていません。そこで、当時の新聞に何か記事が掲載されていないか、東京大学大学院法学政治学研究所付属近代日本法政史料センターへ調べに行きました。大宮公園の開園についての記事が掲載された新聞は、時事新報、東京日日新聞、朝野新聞の3紙ありました。これらの記事から氷川神社の秋季祭は9月22日と23日の2日間行われ、大宮公園の開園式は23日に行われたことがわかりました。資料調査の過程でみた、いくつかの刊行物には大宮公園は9月22日に開園したと書かれていました。しかし、今回調べた新聞記事には22日に何かを行ったというものは一切書かれていませんでした。果たして22日に開園したとして良いのか、不安の残る調査結果となりました。

3. 公園の設計者

建築物と同じように、著名な公園は専門家に設計が依頼されました。しかし、明治・大正期はまだ公園が造られるはじめばかりで、公園専門の設計者はおらず、

庭園の設計者や林学者が設計を行うことが多かったようです。

大宮公園に関する大正以前の設計図については本田静六・田村剛によってまとめられた1921年(大正10)の拡張計画図が知られるのみでした。しかし、この展示の資料調査の過程で、開園準備に伴い作られたと推定される明治17年の設計図(写)と大正初年頃の拡張計画図の二枚の設計図を確認することができました。この発見は、大きな成果でした。

開園準備の中で大宮公園の設計を依頼されたのが「佐々木可村」です。佐々木についてはこれまでまとまった研究がなく、不明な点が多い、謎の人物です。何か手がかりがないかと探した結果、明治・大正期のいくつかの文献に登場し、その足跡をまとめると以下のようになります。

- 一、大隈重信が大阪から佐々木を東京へ呼び寄せた。
- 二、大隈重信の雉子橋邸と早稲田邸(現大隈会館)の庭園を築庭。
- 三、渋沢栄一の飛鳥山邸の庭園を築庭。
- 四、靖国神社の神池庭園を築庭。
- 五、第一流の築庭家で、文人流の風致に徹底していた。

六、明治43年にはすでに他界。

明治の著名な実業家・政治家の庭園設計者に大宮公園の設計が依頼されたことは重要な点です。特に渋沢は当県の出身であり、渋沢の紹介によって佐々木に設計が依頼された可能性も考えられます。

先に書いた、この佐々木の設計図の写しと思われるものは(財)東京都公園協会に保存されていました。和紙4枚を貼り合わせた56センチ×76センチの大きさで、墨書きで、園路は朱墨で書かれています。右上に「明治17年武蔵一ノ宮 氷川公園ノ図」とあり、魚のようなその特徴的な形から大宮公園の設計図とわかります。埼玉県行政文書の中には開園当初の設計図(全体)は現存せず、部分的な植栽計画図と四阿の外観図のみ残っています。この部分的な図は桜は薄桃色、松は緑色と色分けをして描かれています。当初の佐々木の設計図も彩色されていた可能性があります。

さらに興味深いのは図の左下に「佐々木先生設計 図面写田中」とあり、佐々木先生は佐々木可村を指し、田中とは大正初年頃の拡張計画を委託された長岡安平の助手・田中真次郎と推定されます。

この図は、東京都公園協会へ寄贈され

た長岡安平(東京市で公園の設計・維持管理を長く担当)の遺品の一つでした。

明治から大正年間にかけて、大宮公園は東京近郊の行楽地として、多くの観光客でにぎわいました。さらに、明治末以降は学校が林間学校や遠足で訪れることも多くなりました。しかし、園内の主要な部分は旅館や茶店等に貸し出され、学校等の団体が運動や、休憩をとるような施設がありませんでした。そのため、公園の規模を拡張し、設備を充実してほしいという意見が多く出されるようになりました。大正元年から、拡張部分の用地買収が始まり、新しい大宮公園への改良計画が始動しました。

それを依頼されたのが、先に登場した長岡安平とその部下・井下清です。調べたところ、この改良計画の具体的な内容や図面は埼玉県行政文書の中にはありませんでした。ただし、1913年(大正2)と翌年の知事引継書の中には、長岡が現地調査を終了したこと、水害対策工事に予算がかかり、公園の改良計画には着手できなかったことが記されています。

調査を進める中で、長岡安平の一周忌(昭和元年:1926)に刊行された「租庭 長岡安平翁造庭遺稿」の中に「氷川



写真1 松茸狩りが楽しめる大宮公園

『皇后陛下行啓記念誌』(大正11年・1922)より

別名「松の公園」と呼ばれたように、大宮公園には自生していた赤松が数多くありました。

ト、絵はがき等を作り、戦略的に宣伝する方策に

最終章では保勝会(現在の観光協会)を組織して公園の名物、パンフレット、絵はがき等を作り、戦略的に宣伝する方策に

の中にはなく、計画図のみ掲載されていました。長岡に依頼された大正元年開始の拡張計画はいろいろな事情で実現しなかったのです。それから数年後、1920年(大正9)に公園の拡張計画は再度動き出し、その指導・設計は本県出身の東京帝国大学の本田静六に依頼されました。翌年「埼玉県水川公園改良計画」として刊行され、これを基に現在の大宮公園が造られています。この計画書の冒頭には「県民のための公園だけではなく、東京市外公園としての役割が重要である」と書かれています。来園者の増加は大宮町の発展と県の経済振興をもたらすからです。そして、現在の自然環境を守りつつ、運動場や遊園地的施設も完備し、年間を通して来園者を確保できるように改修する必要性が述べられています。また、

まで言及しています。今も話題になる「地域興し」が当時の埼玉県にとっても重要な課題であったことが読みとれます。

4. おわりに

大宮公園120年の歴史の中で、公園の社会的な役割が時代とともに変わってきました。時代の要請に合わせて、多くの人々の活動によって大宮公園は拡張整備され、現在の姿となってきたのです。

今回は設計者に焦点をあて、明治・大正期の大宮公園を紹介しました。これまで、あまり強調されてこなかった点ですが、時代を代表する設計者が関わってきたということは重要な点です。

学芸員の仕事は表に出ない部分が多く、地道な資料調査の積み重ねです。資料調査の過程で新しい発見があった時の喜びは、この仕事ならではの思っています。

公園改良設計略図」という題の図面が収録されているのを発見しました。長岡は明治20年代から大正14年に亡くなるまで、東京だけではなく、全国各地の40以上の公園の設計や改良計画に携わりました。遺稿集には長岡が手がけた公園の一覧が掲載されていますが、大宮公園はこ